

日英の動詞形の比較

——実況放送から見えてくるもの——

佐野 まさき

Abstract

As is well known, the simple present tense is used for events that occur in real time in running commentaries in English. The present progressive may also be used, though less frequently than the simple present. The situation is similar in Japanese: the *te iru* form of a verb, which often (though not always) corresponds to the English present progressive form, may be used, but not as often as the simple *ru* form, which is the Japanese analogue of the English simple present form. Both the English progressive and the Japanese *te iru* form can refer to ongoing events, whereas both the English simple present and the Japanese simple *ru* form can refer to instantaneous events. However, the simple distinction based on durativity of events is not enough to choose one form over the other, since the same real-time event may be described in either form in both languages. The question that arises is what determines the form used for seemingly the same event. Furthermore, Japanese has another form that can be used in the context where in English the simple present is virtually the only option: the simple *ta* form, which is a Japanese analogue of the English simple past or present perfect form. This is quite notable in view of the fact that in English running commentaries, the simple past and the present perfect forms are rarely used to refer to events viewed as simultaneous with the present act of speaking. Furthermore, the simple *ru* and *ta* forms may be used for the same event in real time in Japanese, resulting in the two forms appearing to be interchangeable. However, closer scrutiny reveals that they are not in fact interchangeable and a certain type of context prefers one form over the other. What is the difference between the contexts that favor one form and those that favor the other? An answer will be given which may shed light on one important difference between Japanese and English.

1. はじめに

動詞が文のかなめとして使われる時、ほとんどの場合、英文法などで言う時制を組み入れた定形で使われる。英語では時制形態として現在形と過去形があり、日本語ではそれとおおよそ対応するものとしてル形とタ形がある。そして現在形およびル形のほうが、過去形およびタ形よりも基本的な動詞形態と言える。これは現在形やル形が、時間的な方向が過去や未来に向いているといったテンス的な偏りがなく、またアスペクト的にも完了性に関して中立的であり、そこから汎用性も出てくるという、意味用法的な観点からも言えようし、また、日本語ではル形は（辞書の見出し語の形という意味で）辞書形とも呼ばれる一方、タ形は、ル形とは違って、述語に助動詞のタが後続した形と分析され、タ自体が独立の辞書項目として記載されるという形態論的な観点からも言えよう。

現在形およびル形を使った複合形として、英語では現在進行形、日本語ではテイル形と呼ばれる

ものがある。現在進行形は、動詞 *be* の現在形を助動詞として、動詞の現在分詞形によって表される構文形式である。テイル形は、動詞 *il* のル形を補助動詞として、動詞のテ形によって表される構文形式である。より複雑な形式の現在進行形とテイル形から、単純な形式の現在形とル形を区別するために、後者を特に単純現在形および単純ル形と呼ぶことがある。単純現在形、現在進行形、単純ル形、テイル形の日英合計4つの形式に共通に内在する「現在」という（偏りのない）テンスの性質を最大限に利用できる文脈にあるのがスポーツの実況放送である。ここでは、発話時という現在時に、選手の動きをその時その場で描写するのに（単純）現在形／ル形が活躍する。これは一見当たり前のようにも見える。しかし選手の動きをそれが起こると同一の時空間で伝えるのに現在形／ル形を用いるのはうなずけるとしても、単純現在形と現在進行形、および単純ル形とテイル形はどのように使い分けるのかという問題がある。

また、日本語ではたとえ発話時という現在時に、選手のその時の動きをその場で描写するのであっても、単純ル形ではなく単純タ形が使われることもある。英語では決して過去形（あるいは現在完了形）が使われない場面で、日本語では単純タ形という選択肢があるのはどうしてかという問題も問われなくてはならない。

本稿の目的はこのような問題を中心に論じ、日英の共通性と相違の一側面を明らかにすることにある。分析の対象としては、実際の日英語の実況放送の例、すなわち実例を使いながらも、その実例に手を加えたり、作例を用いることも試みる。従来の研究では、拠り所とする言語事実として、実例一辺倒（いわゆるコーパス至上主義）か、作例一辺倒（いわゆる内省至上主義）のどちらかに偏る傾向が見られる。しかし本稿は、両者の長所を取り入れる折衷主義的方法をとることで、そうは言えるがこうは言えないといった事実観察を可能にし、その事実を統制している背後の規則性を見いだすことを、実例（コーパス）のみが観察の対象として意味があると思われがちな領域のひとつ—実況放送—に対して試みるものである。

2. 英語の現在進行形と日本語のテイル形の共通性

実況放送の分析に入る前に、英語の現在進行形と日本語のテイル形の基本的用法の1つを把握する意味で、両者に共通する性質を見ておこう。

現在進行形とテイル形に共通する性質としてすぐに思い浮かぶものはいくつかあるが、まずあげる1つ目の性質として、現在進行形も、テイル形も、一時的な事象について用いることができるということがある。これは、次のように、対応する英語の単純現在形や日本語の単純ル形と比べてみると明らかである。

- (1) a. *My watch works perfectly.*
b. *My watch is working perfectly.*
- (2) a. 私の腕時計は正確に動く。
b. 私の腕時計は正確に動いている。

(1) は Leech (2004: 20) からの例であるが、動詞 *work* が単純現在形の (1a) は、問題の時計が正

確であることを恒久的なものとして捉えているのに対し、現在進行形の (1b) は、時計の正確さを一時的なものとして捉えている。(Leech(2004: 20)は前者を“permanent state”、後者を“temporary state”としている。)同様の対比は、日本語の単純ル形の例 (2a) とテイル形の例 (2b) についても言えるだろう。問題の腕時計について、それが遅れたり進んだりする不具合がよく起こるような場合は (1a) や (2a) は使えないが、そのような時計でも、たまたま発話時点で (例えば街なかで目にした時計表示板と見比べて)、正確に動いていると観察されれば (1b) や (2b) のほうは使える。あるいは逆に、ふだん正確に動く腕時計が発話時にたまたま電池切れなどで動いていなくても、それは時計の恒久的な正確さを否定するものではないので (1a) や (2a) は使えるが、(1b) や (2b) は、発話時に動いていない以上、使えない。

現在進行形やテイル形が一時的な事象を示す例として、次のようなものはさらに分かりやすいだろう。

- (3) a. Ken drinks beer.
b. Ken is drinking beer.
- (4) a. ケンはビールを飲む。
b. ケンはビールを飲んでいる。
- (5) a. Ken speaks Chinese.
b. Ken is speaking Chinese.
- (6) a. ケンは中国語を話す。
b. ケンは中国語を話している。

動詞が単純現在形の (3a) と単純ル形の (4a) は、ふだんケンがビールを飲む人間であるという、ケンの非一時的な性質 (日常的な習慣) を述べることができるのに対し、現在進行形の (3b) とテイル形の (4b) は、そのような恒常性はなく、発話の時点において (例えば飲食店といった発話の現場で) ケンがビールを飲んでいる最中であるといった、一時的な状況を述べている。(5a) と (6a) も同様に、ケンが中国語を話す人間であるという、ケンの恒常的な能力を述べることができるのに対し、現在進行形の (5b) とテイル形の (6b) は、そのような恒常的な能力ではなく、発話の時点において (例えば中国語の授業の現場で) ケンが中国語をしゃべっている最中であるという、一時的な状況を述べている。

このように、(1) - (6) の b 文のような現在進行形やテイル形は、発話時における一時的な事象を述べるのに使うことができる。これは、(1) - (6) の a 文のような単純現在形や単純ル形が、継続性のある性質や習慣や能力を述べているのと対照的である。

ところが、現在進行形やテイル形のほうが、対応する単純現在形や単純ル形より継続的な事象を表している場合もある。例えば (不幸な例であるが、かつての世界貿易センタービルの崩壊など) 大きな建物が眼前で崩れるのを見て、次のように言うとする。

- (7) a. The building falls down!
b. The building is falling down.
- (8) a. ビルが崩れ落ちる！

b. ビルが崩れ落ちている。

単純現在形の (7a) は建物の崩壊が始まるや否やの瞬間に言うことができるのに対し、現在進行形の (7b) のほうはそうではない。(7b) は、ビルの崩壊が始まった後、どんどん崩れ落ちていき、崩壊が終わるまでのあいだの崩壊過程を描写するのに使う。すなわち前者は瞬間的 (Leech (2004: 19) では “sudden” あるいは “instantaneous”) であるのに対し、後者は時間幅のある漸進的 (Leech (2004: 19) では “gradual”) なものである。日本語の単純ル形の例 (8a) とテイル形の例 (8b) でも同様の使い分けができる。

現在進行形とテイル形が示す、(1) - (6) の b 文で見た一時性と、(7) (8) の b 文で見た継続性とは、一見反対の性質のように見えるが、矛盾するものではない。一時性というのは、瞬時性とは違い、たとえ短くても継続性を有し得るものである。また継続性というのは、恒久性とは違い、たとえ長くても一時的であり得るものである。したがって現在進行形とテイル形は、共通に持つ性質として、「一時的継続性」を有するとすることができる¹⁾。この「一時的継続性」は Leech (2004: 19) が進行形について “The Progressive Form indicates *limited duration*” (イタリック原文) と特徴づけたものに相当する。Leech 自身は明確に指摘していないが、現在進行形／テイル形が、恒久的な事象を表している単純現在形／単純ル形と比べられると、「一時的継続性」の一時的な側面が際立ち、瞬時的な事象を表している単純現在形／単純ル形と比べられると、継続的な側面が際立つことになる。したがって単純現在形や単純ル形が恒久的な事象にも瞬時的な事象にも用いられることのほうがむしろ問題になりそうだが、これは前節で触れた、単純現在形や単純ル形のテンスやアスペクトの中立性と関係していると思われ、これ以上は立ち入らない。本稿では、単純現在形や単純ル形についてはそれが表す瞬時的な事象に的を絞り、それが典型的に見られるスポーツの実況放送を考察しながら、現在進行形やテイル形、そして単純タ形とどのように使い分けられるのかを分析していく。

3. 実況放送における現在進行形／テイル形

スポーツの実況放送では単純現在形や単純ル形が頻繁に現れるが、それは選手の動きを瞬間的なものとして捉えて言う場合で、継続的に捉えた場合は現在進行形やテイル形が用いられる。まず次の例を考えてみよう。

- (9) a. Smith passes to Devaney, Devaney to Barnes — and Harris intercepts...Harris passes back to Simms, nice ball — and Simms shoots!

(Swan (2005: 453)、下線は原文ではボールド)

b. They are passing to each other.

- (10) a. スミス、デバニーにパス(する)、デバニーはバーンズに回す。ハリスがインターセプト(する)。ハリス、シムズに回す、いいボールだ。シムズ、シュート(する)!
b. 互いにボールを回しています。

(9) は、Swan (2005) によるサッカーなどの団体球技の英語実況放送の例で、(10) は佐野による

日本語訳である。ボールをパスしたり奪ったりという時間の短い動きを瞬時に捉えて述べる場合は動詞は (9a) (10a) の下線部のように単純現在形や単純ル形になる²⁾。一方、味方同士でボールを回し合うという、継続的な様子を述べる場合は動詞は (9b) (10b) のように現在進行形やテイル形になる。継続していれば実況にも発話時間の余裕が出ることから、日本語では (10b) のように文体が常体より長めのデスマス体になることも多い。(9a) (10a) では <パス→パス→インターセプト→パス→シュート> という連続して変化する場面を順次捉えているが、このように場面が次から次へと変わるような球技で、(9b) (10b) のように現在進行形やテイル形を使うには、それによって表される事象が、場面の切り替わりのない継続性を (一時的に) 有することが必要である。したがって (9b) (10b) は、サッカーよりも、バスケットボールやハンドボールなどのほうが (ボールを回しあうという1つの場面が継続する機会が多いという) 球技の性質上、使われる状況が生じやすいだろう。逆に、サッカーよりいっそう場面がめまぐるしく変わるアイスホッケーとなると、「互いにパックを回してい {る/ます}」のようなテイル形 (のデスマス体) が使われる状況はほとんどないと思われる。実況放送での単純現在形と現在進行形の使い分けについて、Leech (2014) および Swan (2005) は次のように述べている (日本語訳は佐野)。

- (11) a. Radio and TV sports commentators tend to use the Simple Present for single brief events in the progress of the game[...]. The Progressive tends to be used for sports happenings which take a longer time or are more gradual—especially those that are not part of the main action[...].

(ラジオやテレビの実況放送アナウンサーは、進行しているゲームの一つ一つの短い出来事に対して単純現在形を使う傾向がある。進行形のほうは、より長い、あるいは漸進的な出来事、特に、主要な動きの外にあるような出来事に対して、使われやすい。) (Leech (2014: 19))

- b. In commentaries, [...t]he simple present is used for the quicker actions and events (which are finished before the sentences that describe them); the present progressive is used for longer actions and situations.

(実況放送では、単純現在形はより素早い動きや出来事 (これらはそれを描写する文を言い終わる前に終わってしまっているのであるが) に対して使われる。一方、現在進行形はより長い動きや状況に使われる。) (Swan (2005: 453))

Swan (2005: 453) はサッカーの実況放送よりもボートレースなどのほうが現在進行形がよく使われるとして、次のような例をあげている (下線は原文ではボールド)。

- (12) Oxford are pulling slightly ahead of Cambridge now; they're rowing with a beautiful rhythm; Cambridge are looking a little disorganized...

(オックスフォードは今ケンブリッジの少し前に出てきています。きれいなリズムで漕いでいます。ケンブリッジは漕ぎ方がややまとまっていないようです。)

丸カッコ内の日本語訳は佐野によるものであるが、日本語での実況放送でもその下線部で示したようにテイル形（のデスマス体）が使われるところだろう。英語の現在進行形同様、日本語のテイル形も、継続的な動きの多いボートレースのようなスポーツの実況放送で利用されやすいということである。

注意すべきは、動きがゆっくりとした長いものでなく、素早く短いものであっても、それを継続的に捉えることができれば、現在進行形やテイル形の使用が可能であるということである。次の例は野球（アメリカメジャーリーグ、マーリンズ対メッツ戦、現地時間 2015 年 4 月 16 日）の実況放送からの実例である。ボールが飛んだりそのボールがフェンスに当たって跳ね返るといふ瞬時瞬時の描写には下線部のように単純現在形が使われているのに対し、ボールを打ったイチロー選手が 3 塁に向かう継続性のある動きは二重下線部のように現在進行形が使われている³⁾。

- (13) Three-two. Ichiro hits it to right center field. Hits it pretty deep. Granderson, back at the track. He won't get it. Bounces off the wall. Ichiro is racing for third. On his way with a triple, ball bounces off his back.

この (13) の英語の実況とまったく同じ場面の、日本語の実況放送の実例は次の (14) である。(13) ではピッチャーが投球する直前に“Three-two”とボールカウントを言っているが、(14) は「9 球目」と次の投球数を言ったところからである⁴⁾。

- (14) 9 球目…上がったのは…ライトだ。ライト、バックする。ライト、バックして、ライト、バックして…捕れない！さあ、フェンスにワンバウンドで当たった。イチローは、二塁から三塁に向かったー！スリーベースヒット！

英語では“*Ichiro is racing for third*”と現在進行形で描写されている場面は (14) では「イチローは二塁から三塁に向かった」と単純タ形になっているが、継続性のある場面なので「向かっている」とテイル形にすることもできる。ただしその場合、(14) の「スリーベースヒット！」がすぐに後続するのは少し落ち着きが悪くなる。(13) では、(ライトから返球されてきた) ボールのゆくえを言っている“(On his way with a triple,) ball bounces off his back”が現在進行形の文に続いているが、それに対応するような「ボールはイチローの背中に当たった(が)」のような文を「スリーベースヒット」の前に挿入してみると、次の例 (14)' が示すように、今度は「向かった」が落ち着きが悪くなる。

- (14)' [...] さあ、フェンスにワンバウンドで当たった。イチローは、二塁から三塁に {向かっている / ?? 向かった}。ボールはイチローの背中に当たった(が) …スリーベースヒット！

つまり、(14) では「向かっている」より（実際のアナウンサーの発話である）「向かった」のほうが自然で、逆に (14)' は（作例であるが）「向かっている」が自然で、「向かった」だと文脈的にしっくりしない。これはなぜだろうか。

英語の実況放送の (13) では、現在進行形の“*Ichiro is racing for third*”の直前は単純現在形の“*Bounces off the wall*”でボールのゆくえを追っており（ただし主語の ball は省略されている）、直後も

“On his way with a triple, ball bounces off his back” と、やはり単純現在形でボールのゆくえを述べている。三塁打になったことは (on his way) with a triple のように副詞的付加詞として付随的に述べられているだけで、あくまでも注目の対象はボールである。基本的に単純現在形は実況放送で瞬時の動きを述べる点的な描写であるのに対し、現在進行形は継続的な動きを述べる線的な描写であるとする、線的な現在進行形を点的な単純現在形と隣り合わせで使うのはどのような効果があるだろうか。それは、単純現在形が表す出来事背景として、現在進行形が表す出来事を描写するという効果だと思われる。この現在進行形が表す背景は、Leech が (11a) の後半で進行形がどういふ出来事について使われるかを述べた部分の *those that are not part of the main action* というのに対応する。そうすると、(13) でイチロー選手が三塁に向かう出来事は、現在進行形によって背景的に述べられており、前景となっているのは、その前後に単純現在形で描写されているボールのゆくえということになる。この単純現在形と現在進行形による前景と背景の役割分担が日本語の単純形とテイル形によっても同様になされるとしてみよう。(「日本語の単純形」というのは、単純ル形と単純タ形の総称である。実況放送での単純ル形と単純タ形の違いについては後述する。) そうすると、(14) で「向かった」の代わりに「向かっている」というテイル形を使うと文脈的な収まりのなさが生じるのはなぜなのか理解できる。(14) では「向かった」という単純形のすぐあとに「スリーベースヒット」と発話されているので、注目されているのはイチロー選手の動き(二塁から三塁への走塁)およびイチロー選手によって成し遂げられたこと(三塁打)である。ところがそのイチロー選手の動きを、たとえ継続的なものであっても「向かっている」のようにテイル形で表すと、その動きが背景化されることになってしまい、直後の「スリーベースヒット」という、同選手の成し遂げたことを直接前面に出しているのと文脈上の不整合を生じることになるのである。(何よりも、日本人アナウンサーによる実況放送であるから、イチロー選手の動きを背景化するような描写は無意識のうちに避けるのは自然なことである。) イチロー選手の動きをテイル形で表すのが適切であるためには、それを背景とするものとして適切な描写が「スリーベースヒット」の前に出てこなければならないが、(14)' では「ボールはイチローの背中に当たった」がそれに当たる。これにより、目で追う前景となっているのは、前の文の「フェンスにワンバウンドで当たった」に引き続き一貫してボールのゆくえであることが保証され、イチロー選手の動きを描写した「(イチローは、二塁から三塁に) 向かっている」というテイル形の文はその背景描写として適切なものになる。(そしてこれと同じことをしているのが英語の実況放送の (13) である。) (14)' で「向かった」という単純形を使うと、<ボールのゆくえ(単純形「当たった」)→イチロー選手の動き(単純形「向かった」)→ボールのゆくえ(単純形「当たった」)> といったように、注目の対象がボールのゆくえからイチロー選手の動きに移り、またボールのゆくえに戻るといふ、3つの出来事がそれぞれ別個の前景のように連続して、注目の対象が一貫しないぎくしゃくした描写になってしまうのである。

かくして、英語の現在進行形も、日本語のテイル形も、出来事を継続的に捉えるものであり、その継続性が持つ線的な性質が、問題の出来事を、単純形で瞬間的・点的に描写された出来事に対する背景とするような効果をもたらすことになる。図 (figure) と地 (ground) の区別で言えば、線的な現在進行形/テイル形は図であり、点的な単純形は地ということである。

このような背景(図)対前景(地)の区別は、野球のように選手それぞれが打者、投手、捕手、内野手、外野手といったそれぞれ違った役割を担っているような団体競技に起こりやすいだろう。それぞれが違った役割を担っていれば、ある場面において、ある役割を担ったものが前景として、別

の役割を担ったものはその背景として、描写されるのは自然なことである。一方、(12) であげた Swan (2005) のボートレースのようなスポーツは、団体競技であっても、一団体を構成する選手個人の役割の区別は、少なくとも（実況放送者を含めた）見る側にとってはほとんど意味を持たない。それよりも、役割の区別のない団体（(12) では大学を代表するボートチーム）同士の競い合いが注目の対象となる。したがって (12) の3つの描写がすべて現在進行形で表されているのは、それが表す出来事の継続性を示しているだけで、何かに対する背景ということではない。

しかしながら、役割の区別がまったくない個人競技であっても、見る側からすると、ある競技者個人の動きを別の競技者の動きに対する前景ないし背景として見ることは可能であり、それが単純形とテイル形の区別に反映される場合がある。その実例として次の2009年ベルリンでの世界陸上男子100メートル決勝の実況放送を見てみよう⁵⁾。

(15) 最速の男が決まります…。一回でスタートしました。並んでいる。ボルトが抜け出した。早くもボルトが抜け出した。ゲイが追いつくか。ゲイが追っている。ゲイが追っている。しかしボルト逃げ切った。

ここでは、下線部で示したようにテイル形が3回出てくる。最初のテイル形「並んでいる」は、直前の「スタートしました」という単純タ形（のデスマス体）が表すスタート直後の状況を継続的に捉えたもので、スタートという出来事の背景を表すものではもちろんない。しかし「並んでいる」の直後の「ボルトが抜け出した」という単純タ形の文は、「並んでいる」が表す状況から物理的な時間としては進んでいる出来事を表したものではあるが、その並んでいる状況を背景として、そこからいわば抜け出てきて前景となった出来事の描写と見る事が可能である。さらに「ゲイが追っている」というテイル形の文が2回繰り返され、「しかしボルト逃げ切った」で終わっているが、これもゲイが追っている状況を背景として、ボルトがそこから逃げ切った出来事を前景的に捉えた描写と見る事ができる。このことは、「追っている」を次のように「追う」という単純形にした場合と比べてみると分かりやすい。

(15)' 最速の男が決まります…。一回でスタートしました。並んでいる。ボルトが抜け出した。早くもボルトが抜け出した。ゲイが追いつくか。ゲイが追う。ゲイが追う。しかしボルト逃げ切った。

「並んでいる」の直後の「ボルトが抜け出した」は、前述の通りボルトの動きが前景化され、注目の対象として描写されている。それに引き続く「早くもボルトが抜け出した」という同様に単純タ形の文でもボルトの動きが注目され続けているが、「ゲイが追いつくか」を境にして、今度は「ゲイが追う」という単純ル形の文で、注目の対象をゲイの動きに移すことになる。そしてもう一度「ゲイが追う」を繰り返したのち、最後は「しかしボルト逃げ切った」という単純タ形の文で、レースの勝者に注目が移ることになる。すなわち、ボルトの動きとゲイの動きのどちらも単純形で表されている場合は、一方が他方に対する背景というわけではなく、同じように注目の対象として描かれているわけである。さきほど、(14)' で「向かった」という単純形を使うと、注目の対象が一貫しないぎくしゃくした描写になる旨述べたが、100メートル走のような短時間の個人競技で役割分担のない

スポーツの場合は、注目の対象が目まぐるしく変わるのはむしろ自然なことである。(また (14)'では「イチローは」「ボールは」のように注目の指示対象を「は」で表示しているのに対し、(15)'では「ボルトが」「ゲイが」と「が」で表示していることも考慮すべきである。)

いずれにせよ、100メートル走のような、素早く短い動きの場合でも、その動きは(15)'のように単純形で表すだけでなく、同じ動きを(15)のようにをテイル形によって継続的に捉えることも可能ということは注目に値する。

4. 実況放送における単純ル形と単純タ形

英語の実況放送では、出来事を瞬時的な動きとして描写するのはほとんど単純現在形に限られるのに対し、日本語の実況放送ではすでに(14)や(15)で見たように、単純ル形だけでなく単純タ形も使われる。そこで、実況放送における単純ル形と単純タ形の使い分けについて考えてみることにする。

実例の(15)の「追っている」を単純ル形「追う」にして、全体として単純ル形と単純タ形が似たように分布した形になっている(15)'を見直してみよう。スタート前の「最速の男が決まります」は単純ル形(のデスマス体)であるが、選手の動きの描写ではない。選手の動きの描写は「一回でスタートしました」というスタートの場面から始まる。ここは(スタート直後でありまだ時間的に余裕もあることから)デスマス体であるが、常体であれデスマス体であれ、「一回でスタート {する / します}」という単純ル形は決して使えず、「一回でスタート {した / しました}」のように、単純タ形しか使えない。(もちろん「一回で」をとって「スタートします」のように言えば、スタート直前のこれから起こることを伝える発話としては使えるが、「最速の男が決まります」同様、選手の動きを描写したものではない。)次に出てくる単純形は「並んでいる」の直後の「ボルトが抜け出した。早くもボルトが抜け出した。」で、やはりタ形である。ここもタ形のほうが、「ボルトが抜け出す。早くもボルトが抜け出す。」のようなル形より自然である。ただしタ形の選択の義務性に関して注意すべき違いが出てくる。すなわち、さきほどのスタートの描写を「一回でスタート {する / します}」のようにル形にするのはまったく不可能であるのに対し、「(早くも)ボルトが抜け出した」の場合は、代わりに「(早くも)ボルトが抜け出す」というル形にしても、不自然ではあるが、まったく不可能になるわけではないということである。さらに、「ゲイが追いつくか」のあとに現れるル形の「ゲイが追う。ゲイが追う。」の場合は事情が逆転して、タ形の「ゲイが追った。ゲイが追った。」にするのは不自然ではあるが、やはりまったく不可能ということではない。そして最後の「しかしボルト逃げ切った。」というタ形は、最初のスタートの場面と同様、「しかしボルト逃げ切る。」のようにル形で言うのは、まったくと言っていいほど不可能である。まとめると、最初のスタートと最後のゴールの場面は事実上タ形しか選択の余地がなく、途中の場面では、タ形とル形の選択の余地はあるが、並んでいる状況からボルトが抜け出す描写ではタ形のほうがル形より自然、ゲイが追いつくかどうかの状況ではル形のほうがタ形より自然ということである。これはどういうことだろうか。

レースのスタート(開始)とゴール(終了)は、レース全体の流れの中でもっとも重要な展開あるいは変化の場面である。このような注目すべき局面では単純ル形ではなく単純タ形が使われる。これはおそらくタが持つ完了相を表す機能と関係しているだろう。スタートとゴールの間の流れはど

うだろうか。その流れの中で生まれる出来事を、流れを変化させたり新しく展開させる、他の出来事と独立した注目すべきものと見るか、それとも他の出来事や状況とともに自然な流れを構成するものと見るかは、主観が入り込む余地がある。(15)/(15)'で、走者が並びあっている状況からボルトという一人の走者が抜け出す出来事を、レースの流れを変化あるいは展開させるものと見るのは自然であり、そのような捉え方を表すのが「ボルトが抜け出した」のような単純タ形ということになる。もし「ボルトが抜け出す」と単純ル形で言ったら、それは問題の出来事が、他の出来事や状況とともに、レースの自然な流れを構成するものであるという捉え方をしていることになる。これは、たとえば競技者全員の実力からして、並んでいる状態からボルトが抜け出すのは自然なレースの流れである（と発話者が捉える）のであれば不可能なことではない。このように考えれば、問題の場面を「抜け出した」というタ形で描写するほうが自然ではあっても、ル形で描写するのも不可能なことではないことの説明がつく。

(15)'の「ゲイが追いつくか」のあとの「ゲイが追う」はどうだろうか。レースを目で追っているアナウンサーの「ゲイが追いつくか」という発言は、その前の「(早くも)ボルトが抜け出した」という発言と合わせて、レースがゲイがボルトを追う流れになっているということを想起させる。したがってその流れを構成するものとしてル形の「ゲイが追う」を続けるのは自然なことである。これはルが持つ未完了相を表す機能を利用したものだろう。もし「ゲイが追いつくか」のあとに「ゲイが追った」とタ形で続けると、レースの流れを変えるような新しい局面が展開されたような印象を生ずる。たとえば「ゲイが追いつくか」という発言が、(ゲイがボルトを追う流れになっている様子を実況放送したものではなく)単にアナウンサーの関心事を述べたものに過ぎないのであれば、そのあとの「ゲイが追った」というタ形による場面描写は、そのような関心事に対する、レースの注目すべき展開を示すことになるだろう。これはあり得ないことでも実況放送の運び方としては考えにくい。よって問題のレース場面では、「ゲイが追う」は自然で「ゲイが追った」は不可能ではないにしろ不自然ということになる。

ある出来事が、それまでの流れを変化させたり展開させたりする、際立った要素である（と発話者が捉えた）場合に使われるのが単純タ形で、自然な流れの中の一構成要素である（と発話者が捉えた）場合に使われるのが単純ル形ということである⁶⁾。以下、この路線が正しい方向にあることを他のスポーツの例で確認していく。

まず、サッカーの例(10a)(丸カッコをとって下に(16)として再掲)をあらためて見てみよう。

(16) スミス、デバニーにパスする、デバニーはバーンズに回す。ハリスがインターセプトする。ハリス、シムズに回す、いいボールだ。シムズ、シュートする！

この例は、英語によるスポーツ実況放送では単純現在形が通例使われることを示すSwanの例(9a)を佐野が日本語に訳したものであるが、あえて英語の単純現在形の直訳として下線部のようにすべて単純ル形を用いた。しかし日本語の実況放送としては単純タ形のほうが自然な箇所がある。それはインターセプト(パスの奪取)の場面とシュートの場面で、ここは「ハリスがインターセプトする」や「シムズ、シュートする」のような単純ル形よりは、「ハリスがインターセプトした」や「シムズ、シュートした」のように単純タ形を使うほうが自然である。理由はすでに述べたことから明らかであろう。流れが変化したり展開した(と発話者が捉えた)場合に使われるのが単純タ形であるなら、

インターセプトやシュートはまさにそのような場面である。もしここで(16)のように単純ル形を使うと、インターセプトやシュートが試合の自然な流れを構成する一要素に過ぎないような捉え方になり、いわば冷めたような描写の仕方になるのである。実況放送の対象となる出来事が、英語では単純現在形でしか表せないところを、日本語ではその周囲の状況や出来事とどのように関連しているかで単純ル形と単純タ形を使い分けるのである。

このような使い分けは、野球のバントの実況放送の仕方を見てみるといっそうよく分かる。バッターがバントの構えをすでにしているなど、試合の流れとしてバントが予想される場面でバントした場合(送りバントなど)は、物理的には完了した事象であっても「バントする」のようにル形で実況されることに何の不自然さもない。しかしバントの可能性が考えられる中でその可能性が低い場面にバントした場合(スリーバントなど)は「バントする」というル形は非常に奇妙で、「バントした」とタ形で実況するのが普通である。さらに、バントがまったく予想されていなかった場面で突然バントした場合はル形の「バントする」は決して使われない。(そのような場面でもっとも普通なのは「(スリー)バント(だ)！」のような動詞を使わない形であろうが、今は動詞を使った場合の単純ル形か単純タ形かの選択に話をしばっている。注2を参照。)

送りバントのような場合は、ベース上にいる走者を進塁させるというような流れの中の一構成要素と捉えることができるので「バントする」のようなル形が可能であるが、一般的には、ピッチャーが投げたボールをバッターが打つという行為は、試合を動かす、展開性のある変化である。したがって、ボールを打ち返した場合はほぼ例外なく「打った」のように単純タ形になる⁷⁾。(14)を見ても、イチロー選手がライトに打ち上げた場面は「上がったのは…」とタ形になっている。次の「バックする」は、ライトの奥深くへ飛んだ打球を追う野手の動きとして自然な、守備の流れを構成する出来事の描写であるからル形になっている。「フェンスにワンバウンドで当たった」と「二塁から三塁へ向かった」は、流れに変化や展開をもたらす注目すべき出来事の描写であり、単純タ形が使われている。

(14)では「上がったのは…ライトだ」のような打球のゆくえがライトであることを述べた発話がまずあり、それがこれ以降の文脈を、ライトの守備の流れを描写するのに適したものにしている。したがって、ライトを守る野手のバックする動作は、その流れの一構成要素として「ライト、バックする」のようにル形で表現するのは自然だが、流れを変化させたり新しく展開したりするものとして「ライト、バックした」とタ形を使うのはあまり自然ではない。しかし同じバックする動きでもタ形が自然に使える文脈もある。作例であるが、次の例を比べてみよう。

- (17) a. 打ちました、大きな当たりだ！ライト、バックする、ライト、バックする、入りました！
満塁ホームラン！
b. 打ちました、大きな当たりだ！ライト、バックした、ライト、バックした、入りました！
満塁ホームラン！

ここでは、ライトのバックする動きを(17a)の「ライト、バックする」のようにル形で表現することも、(17b)の「ライト、バックした」のようにタ形で表現することも可能である。これはなぜだろうか。まずタ形がなぜ可能かという点、(14)と違って(17)では先行文脈で打球の方向が述べられておらず、「ライト、バックした」で始めて打球の方向がライトであることが明らかにされている

ので、ライトのバックする動作が守備の新しい流れを展開するものとして捉えられるからである。また、(17a) のようにル形も可能なのは、先行文脈の「打ちました、大きな当たりだ！」というのが、打球の具体的な方向こそ明示されていないが、大きな当たりである以上、外野の方へ飛んだことは明白であり、それによって外野手の守備の流れができることが容易に想像でき、ライトのバックする動きをその流れの一構成要素として捉えることが可能だからである。(17) はしたがって、客観的には同じライトの動きでも、発話者の捉え方次第でル形かタ形かの選択の余地が出てくる例である。先行文脈で打球の方向が明示されていないことが(17b) のタ形を可能にしているということは、それが明示されると、ル形の自然さには影響がなくてもタ形の自然さが落ちることからも分かる。次の(18a) と(18b) の対比である。

- (18) a. 打ちました、ライトへ上がった！大きな当たりだ！ライト、バックする、ライト、バックする、入りました！満塁ホームラン！
 b. ??打ちました、ライトへ上がった！大きな当たりだ！ライト、バックした、ライト、バックした、入りました！満塁ホームラン！

このように、文脈や場面の捉え方次第でル形かタ形かが動く場合がある一方、打球がスタンドに入ってホームランになるといったことは、試合の流れを大きく変えるものという捉え方に事実上選択の余地はない⁸⁾。したがって「入りました」のようにタ形が義務的に選ばれるのは(17) でも(18) でも同じである。(15)/(15)' の100メートル走のようなレースで、スタートとゴールの場面はタ形になるのと同じである。

まったく同一の場面でも、その中のどの出来事をどのように捉えるかでル形かタ形かの選択が変わる例を、実例で見てみよう。1996年に行われた第78回全国高等学校野球選手権大会の決勝戦、松山商業高校対熊本工業高校である。試合は3対3で延長戦に入り、10回裏、熊本工業高校の攻撃でワンナウト満塁という状況になる。そして迎えたのが、「奇跡のバックホーム」として語り継がれることになる有名な場面である。熊本工業高校の打者(本多選手)に松山商業高校のピッチャーが第1球を投じるところから始まる、あるテレビ局の実況放送を下の(19)に示す⁹⁾。

- (19) 本多に第1球、打ちました、ライトへ上がった！大きな当たりだ！ライトの矢野が下がっていき、そして落下点に入る、捕る、三塁ランナー、優勝に向けてのタッチアップ、ボールが返った、タッチは?!…アーウトー!!

最初の打った場面は、すでに見たように試合を展開させる注目すべき出来事なので「打ちました、ライトへ上がった」とタ形である。ところが「大きな当たりだ」のあと、ル形が連続して現れる。まず、その大きな当たりをライトを守る矢野選手が捕球しようと下がっていく(外野の奥の方へ背走/バックする)のは守備の自然な流れの一つであり、(14) や(18a) などで見た「ライト、バックする」同様、「ライトの矢野が下がっていく」のようにル形で描写される。さらに矢野選手がボールの落下点に入るのも、そしてそれを捕るのも、「落下点に入る」「捕る」とル形で描写されている。すなわち、<ボールを見ながら下がる→ボールの落下点に入る→ボールを捕る>という一連の動作は、打球を巡っての守備の自然な流れであり、その一つ一つの出来事はつながり合って全体で一つの流れ

を構成する要素と見ることができ、これがそれぞれの出来事をル形で描写することになるのである。「落下点に入る」の前に「そして」というつなぎの接続詞が使われているのも、出来事をつなかりを示している。しかしライトの矢野選手が捕球すると、場面は三塁ランナーのタッチアップ¹⁰⁾に切り替わり、矢野選手のホームへ向けての返球は「ボールが返った」とタ形になる。ボールの返球を、試合の勝敗につながる展開を示す注目すべきこととして捉えているからである。

ところが同じこの「奇跡のバックホーム」の場面で、別のテレビ局のアナウンサーは、出来事の捉え方およびル形とタ形の選択の仕方では対照的な実況放送をしている。それが次の(20)である¹¹⁾。

(20) 1球目は…ライトへ行ったー！戻る、捕った、ボールは返ってくる！タッチアウトー！

最初の「ライトへ行った」は打球の方向のことであり、(16)の「ライトへ上がった」と同様、展開を示すタ形である。次のル形の「戻る」は少し説明が必要である。実は、(19)で「ライトの矢野が下がっていく、そして落下点に入る」と実況放送されたところでは、実際の状況は、ライトへ上がった打球は甲子園特有の浜風に押し戻されたのである。打球を目で追いながら背走していたライトの矢野選手は、押し戻された打球に、下がる(バックする)のをやめ戻ることになる。すなわち、(16)のアナウンサーが「落下点に入る」と表現したところを、(20)のアナウンサーはその戻る動作について「戻る」と表現したのである。いずれの表現であっても、矢野選手の捕球直前の様子を表したものであることに変わりはない。そしてどちらもル形である。ところがそのあと矢野選手が捕球する動作については、「落下点に入る」と表現したアナウンサーは「捕る」とル形を使い、「戻る」と表現したアナウンサーは「捕った」とタ形を使った。この違いはどこから来るのだろうか。

打球の落下点に入れば、その打球を捕ることは流れにそのまま沿った行為で、流れを変えるような新展開ではない。すなわち「落下点に入る」と表現すれば、それが表現する出来事と同じ流れにあるものとして、捕球という出来事を「捕る」とル形で表現するのは理にかなっている。一方、打球を追って背走していたのが、押し戻される打球に背走をやめ逆戻りすれば、捕球できたとしてもそれは自然な流れの延長線上にあるとは言えず、むしろ新しい展開の始まりと見るのがふさわしい。であれば、その新展開を「捕った」とタ形で表すのは理にかなったことと言える。要するに、落下点に入れば当然そのまま捕球するのが自然な流れであるのに対し、背走していたのを戻れば、はたして捕球できるかどうか注目すべき展開となるのである。

さらに興味深いことに、(20)で「捕った」とタ形で表現した出来事の直後の出来事の返球は、「ボールは返ってくる」とル形になっている。これは、打球を捕球すること自体は新しい流れを作る展開として「捕った」とタ形を使ったのであるが、その新しくできた流れの延長としてボールの返球を捉えているためと解釈できる。流れの延長であることは、「ボールは」と、ボールに対して主題を示す「は」が使われていることと整合している。(19)では「ボールが返った」と、注目を示す展開のタ形とともに「が」が使われていることと対照的である。以上のように、物理的には同一の場面を、観察者がそのどこをどのように捉えるかで表現が変わってくるのが理解できよう。

5. 結論にかえて

本稿では、主にスポーツの実況放送での出来事の描写における、日英語の動詞の単純形と現在進行形／テイル形の使い分けを考察し、次のような共通性と違いを見た。

- (I) 英語の現在進行形が単純現在形と隣り合わせで使われる時、現在進行形で表された出来事は単純現在形で表された出来事の背景として描写される。
- (II) 日本語のテイル形が単純ル形ないし単純タ形と隣り合わせで使われる時、テイル形で表された出来事は単純ル形ないし単純タ形で表された出来事の背景として描写される。
- (III) 日本語の単純ル形は、それが表す出来事を含むひとつの流れの中の自然な構成要素として描写されるのに対し、単純タ形は、流れに変化や展開を与える出来事として描写される。

上の3つのうち (I) と (II) は、英語の現在進行形と日本語のテイル形に共通する談話的機能に関係づけられるものであり、両形式が共有する意味論的性質である継続性と無縁ではない。(III) は、英語では対応するものが見られない使い分けであり、日本語が周りの流れに敏感な言語であることを示唆するものと見ることもできよう。ル形とタ形の一側面だけからこのように日本語の特質にまで安易に一般化するの危険ではある。しかし、たとえば児玉 (2013: 80) の「日本語は [...], 周囲の状況に敏感に反応しながら全体の調和を求めて異質なものを同化させてきた」という指摘との類似性は、偶然ではないだろう。また近藤 (2016) は「…してしまった」のような表現の研究において、「事態が現実の世界で実現すると、事態が想定通りか否かという想定と事態の関係が確定し、その関係についての話し手の感情・評価が具体的に定まる」とし、事態が想定通りか否かの区別の重要性を指摘している。言うまでもなく、児玉の「調和」および近藤の「想定通り」に対応するのが本稿で扱った実況放送における単純ル形であり、「異質」あるいは「想定通りでない」のが単純タ形である。

注

- 1) もちろん両者が共有しないそれぞれ独自の性質もあるが、ここではそれには立ち入らない。また、「彼は死んでいる」などに見られる、テイル形のいわゆる結果状態用法などに「一時性」はないのではないかと感ぜられるが、これは命のあるものがいったん死んだら生き返らないという、我々の世界に対する、言語とは無関係の知識がそう思わせている可能性がある。「彼の目は死んでいる」のような例では、一時的継続性という特徴づけと矛盾しない。定延・マルチュコフ (2006) および定延 (2006) は、テイルの意味をエビデンシャルと捉え、「現在という一時点において当該のデキゴト情報が観察されることを意味する」(定延 (2006: 190)) としている。
- 2) (10a) でカッコで括ったル形の軽動詞「する」は省略され、「デバニーにパス。」のように体言止めのようなこともある。省略した短い言い方のほうが瞬時の動きについていきやすいことは言うまでもないが、それとは別に、体言止めが生まれ出す、デキゴトの1つ1つをモノのように丸ごと掴み取るような臨場感も見逃せない。
- 3) 動画サイト YouTube からの例。タイトル: イチロー神スライディング& 3 塁打全球 ICHIRO SUZUKI [Miami Marlins] 2015.4.17
<https://www.youtube.com/watch?v=EqDTafZHisk>
- 4) 動画サイト YouTube からの例。タイトル: [マーリンズイチロー] 代打で三塁打! 打席全球 2015 年 4 月 16 日 (現地時間) メッツ戦 7 回

<https://www.youtube.com/watch?v=o6SmGt19d60>

- 5) 動画サイト YouTube からの例。タイトル: Usain Bolt 9.58 - 2009 IAAF WORLD CHAMPIONSHIP MEN's 100m FINAL

<https://www.youtube.com/watch?v=jJwcUwfp82w>

- 6) タは呼気の流れを止めて出す破裂音であり、その音声的な性質と、ここで言う流れの変化・際立ちを表すタの機能とを音象徴的に関連づけるのは慎重でなければならないが、日本語の助詞などの機能語に関してこのような音象徴を見いだす試みは牧野 (1996) (特に第 14 章) に見られる。
- 7) ついでに、打者に対するピッチャーの投球そのものも試合の展開であるから、「ピッチャー、第 1 球を投げました!」のようにタ形となるのが普通である。しかし、ピッチャーの投球をバッターが何回もカットし、投球とカットの繰り返しのような流れができていた場合などは、たとえば 20 球目の時であればそれを投げた瞬間に (つまり投球自体は完了した時点で) 「20 球目を投げます」のようにル形で言うことも可能であり、同様に、打者がそのようなボールをカットした瞬間に「カットします」とル形で言うことも可能である。
- 8) 「事実上」とあえてしたのは、現実的にはあり得ないが、打者が打席に入るたびに打球がスタンドに入ってホームランになる流れが作られているような場合は、たとえば 7 人目の打者が打った打球がスタンドに入ったのを見て取ったアナウンサーが「また入ります。これで 7 打者連続ホームランです。」の「入ります」のようにル形を使うことは可能である。言うまでもなく、このような状況ではホームランは試合の流れを変える働きはしていない。注 7 で見た、カットの繰り返しと同様である。
- 9) 動画サイト YouTube からの例。タイトル: 78 回夏の甲子園 熊本工業 VS 松山商業 奇跡のバックホーム
<https://www.youtube.com/watch?v=XptOkxBK9Lw>
- 10) タッチアップとは、野手がフライを捕球の際、走者はいったんもとの塁 (この場合三塁) に戻ってから進塁 (この場合ホームへの生還) を試みなければならないという、ルールで決められた行為のことである。
- 11) 動画サイト YouTube からの例。タイトル: 熊本工対松山商 10 回裏 奇跡のバックホーム Hi-Vision
<https://www.youtube.com/watch?v=g2trwaSDbM8>

参考文献

Leech, Geoffrey (2004)³ *Meaning and the English Verb*. London: Longman.

牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学: 文法を文化で切る』アルク。

定延利之・アンドレイ マルチュコフ (2006) 「エビデンシャリティと現在日本語の「ている」構文」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 pp.153-166, くろしお出版。

定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理 —現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 pp.167-192, くろしお出版。

Swan, Michael (2005)³ *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

児玉徳美 (2013) 「日本語の用字用語」『立命館文学』第 633 号 pp.63-81, 立命館大学。

近藤優美子 (2016) 「テシマッタの使用制約 —なぜ「目的地に到着してしまいました」とカーナビは言わないのか—」『日本語教育』第 164 号に掲載予定。

(本学文学部教授)